分 光 学 会 と 財 政

宮 崎 章*

分光学会が対象とするスペクトル分析技術の範囲は広いが、発光分析は、そのうちでも古くから研究されている分野である。1970年代に ICP 発光分析法が開発されるまでは、発光分析法は溶液の分析にはあまり使われなかったが、ICP の開発により現在では溶液分析にも発光分析が広く用いられている。私が分光学会に関連するようになったのも、ICP 発光分析が国内に普及し始めた頃であった。当時、分光学会の夏の学校で、ICP 発光分析法の開発者である Fassel 教授や ICP の特性解明や応用面を研究していた Barnes 教授などをお呼びして ICP のお話を興味を持って聞いたことを覚えている。しかし、月日も経過して、ICP 発光分析法は基礎的側面はもとより応用面でもほとんど研究され尽くし、ICP を用いた技術は、ICP 質量分析法 (ICP-MS) の研究に主体が移っている。日本分光学会でも ICP-MS に関するシンポジウムが開かれている。分光学会というと電磁波のスペクトル分析を主体とするが、現在では、「粒子の運動エネルギー分析などによって得られるスペクトルの研究」も分光学会に含まれる (標準化学用語辞典, 日本化学会編, 丸善, 1991) から、ICP-MS に関するシンポジウムを分光学会が取り組むことは意味のあることである。また、ICP を用いた技術を我が国では早くから紹介してきたという経緯からも、うなずけるところである。

私事になるが、昨年12月半ばに Barnes 先生夫妻と成田空港でお会いし、数時間ほど、いろいろとお話をする機会があった。先生からは「中国での会合の後、飛行機の乗り継ぎの都合で、数時間ほど時間が空くので、空港で会えないだろうか」という電子メールが届いていたので、「それでは空港出口で待ちますから」と返事をしておいたのである。土曜日だったこともあって12月の空港は人でごったがえしていたが、飛行機が到着してから約30分で、めでたく先生夫婦とお会いすることができた。ICP 関係の方はよくご存じの通り、Barnes 先生は、先に述べたように ICP 発光分析法の基礎的な現象解明はもとより、生体試料、環境試料、医学的な試料などの分析法の開発をおこなってこられた。また最近では、ICP-MS による微量成分分析を広く手がけておられる。今回の中国訪問も、ICP-MS による微量分析法の開発についての会議のためであったらしい。そこで、仕事の面での話はさておいて、私が Barnes 先生に感心しているのは先生の ICP Information NEWSLETTER 発行の活動である。この雑誌は、すでに昨年で22巻を迎えている。もっとも、この雑誌は論文誌ではなく、世界各地の ICP 発光分析、ICP 質量分析に関する情報誌なので、日本分光学会などの雑誌とは性格が異なっている。しかし、20年以上も雑誌を切れ目なく発行することは、なかなか容易ではない。特に、平成7年度から会計担当の常務理事を務めさせていただいている小生にとっては、ICP Information NEWSLETTER の財政面が気になるところである。先生のお話では、なかなか苦労することも多いようである。

さて、私の場合には、なにしろ会計のことは素人なのでいろいろと気を使うことが多い。もっとも、会計の実務は、事務局の方できちんとしていただいているので、大いに助かっている。しかし、なにしろ、預金の利子が非常に低いし、また、景気も全般的には良いとは言えないような状況であるから、会誌の広告の数も多いという状況ではなく学会の財政状態には余裕がない。また、4月からの消費税値上げに付随して、郵便料金も上げられるだろうから、ますます経費がかかることになる。会費の値上げはできる限り避けたいので、会員数の増加を図ること、経費の節減を図ること、会誌への広告を増やして、学会への納入額を増やすことなどが重要になろう。しかし、会員の増加は、なかなか簡単にはいかない。会員諸氏のご努力にもかかわらずこのところ会員数はほとんど増えていない。

* Akira MIYAZAKI

会計担当理事：工業技術院資源環境技術総合研究所

このように考えると、経費の節減を図ることが重要である。私が参加している他の学会では、最近、学会誌を会員に届けるのに、郵便ではなく、宅配便を使っている。このようにすると、経費が少し安いのかもしれない。また、他の学会では、紙の封筒ではなく、薄いプラスチック製の袋で会誌を送ってくる。このようにすると経費が安くなるのだろうか？ 会計担当としては、いろいろと考えてしまう。

学会の財政状態を改善するために、会員諸氏のいっそうのご協力をお願いしたい。